

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:72～73.

多職種との連携で行った初めての小児生体肝移植

塩谷今日子 福田尚子 外川恵子

多職種との連携で行った初めての小児生体肝移植

○塩谷 今日子 (旭川医科大学病院)
福田 尚子 外川 恵子 (旭川医科大学病院)

【キーワード】小児 生体肝移植 多職種 連携

【はじめに】

A病院初の生体肝移植が小児を対象に実施された。移植コーディネーターとしては組織化されていず、プロジェクトチームを立ち上げ、多職種が連携して移植に臨んだ。移植後の拒絶等によりレシピエントは短期間に3度の移植を必要とする事例となった。そのため、今回の経過を標準化はできない。しかし、小児移植への期待は高く、事例を振り返り、課題を得たので報告する。

【目的】

多職種と連携して行った移植看護の課題を明らかにし、今後の看護実践に役立てる。

【方法】

1. 研究対象：生体肝移植を行った患者1名とドナーである両親及び病棟看護師25名
2. データ収集・分析方法：移植前後の経過を看護記録から抽出。その結果を移植前、移植後急性期、回復期に分けてシステム、ケア、教育の3つの視点から評価、課題を検討した。

【倫理的配慮】

対象とした患者と両親に対し、個人情報保護と研究の主旨を文書にて説明し同意を得た。また当院倫理委員会の承認を得た。

【結果】

1. システム
 - 1) 入院前の患者、家族の要望や移植前の準備状況など病棟への情報伝達など外来との連携強化の必要性が明らかになった。
 - 2) 診療科の医師と看護師とはカンファレンスを毎日実施したが、小児科や小児外科といった関連各科とは行えず、情報共有が不足していた。
 - 3) 移植専任のMSWを移植前に整備できていず、臓器移植に関わる制度、書類の説明などが医療者間、家族に対して不足していた。
2. ケア
 - 1) プロジェクトの看護師が専属で急性期ケアを担当し、感染・安全面で問題はなかった。回復期

になり、病態も安定して退院が予定された時点で専属看護師以外も日常ケアを担当し始めると知識不足からケアの統一が不十分となり、説明不足による患者、家族への対応の遅れが生じた。

2) ドナーである両親の強い希望により、急性期から付き添いを許可した。ケアは看護師主体で行い、両親の療養環境へも配慮した結果、ドナーである両親の体調に影響はなかった。

3) 受け持ち看護師を中心に薬剤師、栄養士がそれぞれ専門性を活かした指導を行い、家族の理解と満足を得た。

3. 教育

移植半年前から医師、他院レシピエントコーディネーターを講師に学習会を行い、移植看護に必要な基礎知識等の習得を図った。骨髄移植を行っている病棟だが臓器移植に関して、病棟全体としての知識獲得、経験知の向上には至らなかった。

【考察】

レシピエント移植コーディネーターの主な役割は意思決定の支援と調整、教育にある。今回の移植では、コーディネーターの役割を関連部署との連携やMSWなど他職種とのチーム力で補い、直接的ケアや指導の責任は看護師が担った。

その結果、家族からはコーディネーター不在による不安や混乱はなかったという評価を得た。これは、移植医療における多職種との連携の必要性と看護力の重要性を示唆していると考ええる。

また、看護師の知識、実践力は必ずしも均一化されてはいないため、病棟全体で生体肝移植看護に取り組める教育体制を整え、経験知に左右されない知識と技術、判断力を習得し、看護の質の安定に繋げなければならないと考える。

【まとめ】

1. 多職種との連携を強化し、専門性を活かせるように院内にシステムを確立する必要がある。
2. 移植看護に関する教育体制を整え、看護の質向上を図らなければならない。